

厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
分担研究報告書

健康増進に向けた住宅環境整備のための研究
住宅環境改善の健康状態に関する効果の検証
省エネルギー法の普及に伴う室内温熱環境の改善効果推定のための住宅ストックの断熱水準の推計

研究分担者 長谷川兼一 秋田県立大学 システム科学技術学部 教授
研究分担者 桑沢 保夫 建築研究所 環境研究グループ 環境研究グループ長

研究要旨

本研究では、統計データを組み合わせて、住宅ストックの断熱性能の地域分布を推定する手法の構築を目指している。断熱性能が高い住宅ストックが増加すれば、それに伴う室内温熱環境を始めとする室内環境の質の向上と健康増進効果に期待できる。

本年度は、構築している手法を用いて都道府県別の 2050 年までの断熱水準(断熱等級 1～4)の割合を推計した。住宅ストックの断熱水準割合には地域性が明確に現れており、戸建住宅を例にすると、宮城県では 2030 年時点で等級 4 が 41.3%であるのに対し、同じ東北地方に位置する秋田県では、2030 年で 25.3%に留まっている。このような地域性は当然、温熱環境の質にも影響するため居住者の健康リスクにも大きく作用することになる。今後、断熱等級に見合った温熱環境を評価するため、明け方の室温の低下に着目して都道府県別の温熱環境の水準を定量化する予定である。地域を代表する定量化指標を用いて明け方の室温を評価し、これと循環器系疾患との関連性を示唆するエビデンスを引用することにより、健康リスクの変化を評価する。

A. 概要

省エネルギー法の普及に伴う室内温熱環境の改善による健康リスクの変化を定量的に評価するために、住宅ストックの断熱性能の地域分布を推定する手法の構築し、2050 年までの都道府県別の断熱水準別ストックを推計した。断熱性能が高い住宅が普及すれば、それに伴う室内温熱環境を始めとする室内環境の質の向上と健康増進効果が期待できるため、健康リスク推定に資する情報を整備することができる。

ここで提案する手法は、長谷川ら¹⁾が作成している住宅のエネルギー消費量の将来推計のためのマクロモデルに組み込まれているプロトコールの一部である。公表されている統計データを用いて、都道府県別の家族類型別世帯数と断熱水準別住宅シェアの将来推計を行うことができる。今

後、住宅ストックの断熱水準の分布にもとづいて住宅の室内温熱環境を表現し、その改善による健康増進効果を定量的に評価する。

B. 推計方法

この方法では、家族類型別世帯数を都道府県別に推計し、解体率ならびに新設住宅戸数、新設住宅戸数に占める断熱水準の割合を設定して積み上げることにより、住宅ストックの断熱水準を推計する。都道府県別の統計データに基づいているため、マクロな視点での推計となる。

B1. 家族類型別世帯数の推計方法

家族類型の分類は、国立社会保障・人口問題研究所の世帯数推計データに準拠した分類に加え、今後の高齢化の影響を予測する目的から、高齢世帯と高齢世帯以外の違いが検討できる分類とし

て、①高齢単独世帯・②その他単独世帯・③高齢夫婦世帯・④その他夫婦世帯・⑤夫婦と子から成る世帯・⑥ひとり親と子から成る世帯・⑦その他の一般世帯の7家族類型に分類した。

図1に家族類型別世帯数の計算フローを示す。2015年までを国勢調査の統計値²⁾、2040年までを国立社会保障・人口問題研究所の推計値³⁾を用いた。2050年までは2020年から2040年の人口問題研究所による推計値を対数近似し、推計する年代を代入して独自推計した。

推計は以下のように行った。①2020～2040年の平均世帯人員の推移を対数近似して2050年までの平均世帯人員を算出する。②2020～2040年の各都道府県の人口比率の推移を対数近似して2050年までの人口比率を算出し、全国の総人口に乗じて各都道府県の総人口を算出する。③各都道府県の総人口を平均世帯人員で除すことで一般世帯総数を算出する。④2020～2040年の家族類型別世帯数の割合を対数近似して割合を算出し、2050年までの各年の一般世帯総数に乗じて家族類型別世帯数を算出する。

B2. 断熱水準別住宅シェアの推計方法

図2に推計フローを示す。断熱水準は無断熱、1980年基準、1992年基準、1999年基準とし、外岡らの手法⁴⁾をもとに、各年における着工住宅に占める断熱水準別のシェアから戸数を想定し、1990年時点の断熱水準別の住宅ストック戸数をベースに、断熱水準別の着工戸数を積み上げることにより、各年における住宅ストックに占める断熱水準別住宅数を住戸形態別(戸建住宅、RC造集合住宅、木造集合住宅)に推計する。

推計を以下のように行った。①5年ごとのデータである家族類型別世帯数を直線補完し、各年の世帯数を推計した上で住戸形態別割合^{注1)}を乗じることにより各年の住戸形態別ストック住宅戸数を推計する。②1990年から2020年までの着工数は、住宅新築着工統計より、戸建、長屋、共同住宅の新設住宅戸数を用いた。2019年以降は前年のストック戸数から解体戸数を減じた戸数と当該年ストック戸数との差をその年の着工数とする。③1990年から2018年までの解体戸数は前

年のストック戸数に着工数を加えた戸数と当該年ストック戸数との差をその年の解体数とする。2019年以降は、それまでの解体戸数から住戸形態別の解体比率^{注2)}を求め、前年のストック戸数に乗じて推計する。④1990年から2020年までの断熱水準別の着工住宅戸数は、住宅性能表示・評価協会による建設住宅性能評価書(新築)データに示されている断熱等級の割合を利用した。また、2020年以降の着工住宅は全て1999年基準とした。⑤1990年の住宅ストックに占める断熱水準別シェアを鈴木ら⁵⁾の調査データを引用して、各都道府県に割り付けた。①から⑤のデータをもとに、1990年の住宅戸数に各年の断熱水準別の住宅戸数を積み上げ、無断熱の住宅から解体されていくものとして2050年までの断熱水準別住宅戸数を推計する。

C. 推計結果

C1. 家族類型別世帯数の推計結果

推計結果の例として、図3に全国の結果を示す。今後、世帯数は2025年に最も多く54,116,084世帯となり、その後徐々に減少していく。2050年の世帯数は48,413,573世帯になる結果となった。家族類型別にみると、高齢単独世帯は、2050年の9,635,667世帯となるまで増加を続ける一方、その他単独(高齢単独以外)が減少する。また、高齢夫婦についても2050年まで増加傾向にあり、我が国の高齢化を反映していると考えられる。家族類型別には夫婦と子の割合が最も高いが、減少傾向にあり、若年世帯は全体的に減少することが見て取れる。

C2. 断熱水準別住宅シェアの推計結果

図4、図5に全国の断熱水準別住宅ストック戸数の推移を戸建住宅と集合住宅(RC造)について示す。

戸建住宅では2010年において住宅ストックのうち、等級1が38.9%、等級2が34.8%を占めている。2010年以降、等級1の住宅が解体されて、高い等級を有する断熱住宅が占める割合が増加し、2030年には等級4が32.4%となる。さらに、2050年には半数のストックが等級4以上の住宅

に置き換わることになる。集合住宅(RC 造)においても、戸建住宅の傾向と類似しており、2030年時点で等級4の断熱性能を有する世帯は25.8%、2050年には49.7%となる。

このような推計を47都道府県別に実施した。住宅ストックの断熱水準割合には地域性が明確に現れている。戸建住宅を例にすると、宮城県では2030年時点で等級4が41.3%、2050年では74.0%であるのに対し、同じ東北地方に位置する秋田県では、2030年で25.3%、2050年で39.2%に留まっている。このような地域性は当然、温熱環境の質にも影響しており、それに暴露される居住者の健康リスクにも大きく作用することになる。

D. まとめ

本研究では、住宅ストックの断熱性能を推計する手法を構築し、都道府県別の2050年までの断熱水準の割合を推計した。住宅ストックの断熱水準データを得ることができたため、今後、断熱等級に見合った温熱環境を評価するため、明け方の室温の低下に着目して都道府県別の温熱環境の水準を定量化する。さらに、明け方の室温と循環器系疾患との関連性を示唆するエビデンスを引用することにより、健康リスクの変化を評価する。

<注釈>

注1) 平成30年度住宅・土地統計調査の統計値の各都道府県の値を用いた。

注2) 1991年から2020年までのストック戸数に占める解体戸数の割合をもとに戸建住宅、RC造集合住宅、木造集合住宅に対して、各都道府県の値を算出した。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

<参考文献>

- 1) 長谷川兼一, 松本真一, 細淵勇人, 秋田県を対象とした住宅内エネルギー消費量の将来推計, 日本建築学会技術報告集, 第25巻, 第59号, pp.267-270, 2019.2.
- 2) 総務省, 平成27年度国勢調査, <https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/index.html>
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所, 日本の世帯数将来推計, <http://www.ipss.go.jp/pp-pjsetai/j/hpjp2019/t-page.asp>
- 4) 深澤大樹, 外岡豊, 伊香賀俊治, 三浦秀一, 小池万里, 住宅内のエネルギー消費量の都道府県別将来推計に関する研究(その4) 都道府県別住宅断熱水準, 日本建築学会大会学術講演会梗概集, pp.401-402, 2004年8月.
- 5) 小坂信二, 坂口敦子, 砂川雅彦, 小浦孝次, 鈴木大隆: 既存住宅の建設年次別ストックと断熱水準に関する推定 その2 既存住宅の断熱水準の推定, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 環境工学II, pp.323-324, 2011年8月.

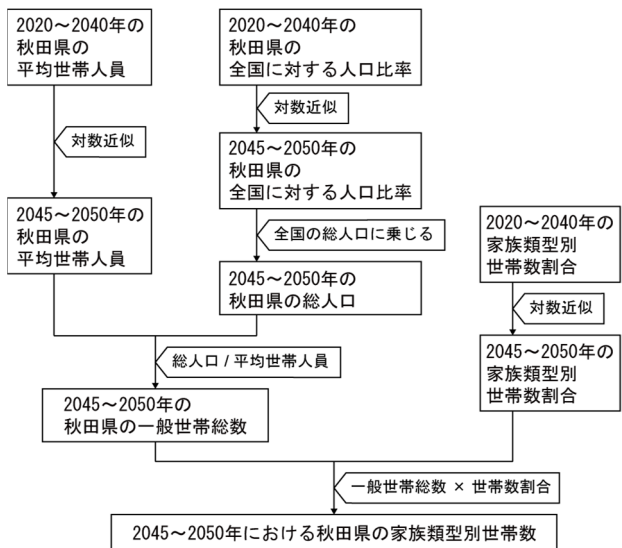


図1 家族類型別世帯数の計算フロー(秋田県の例)

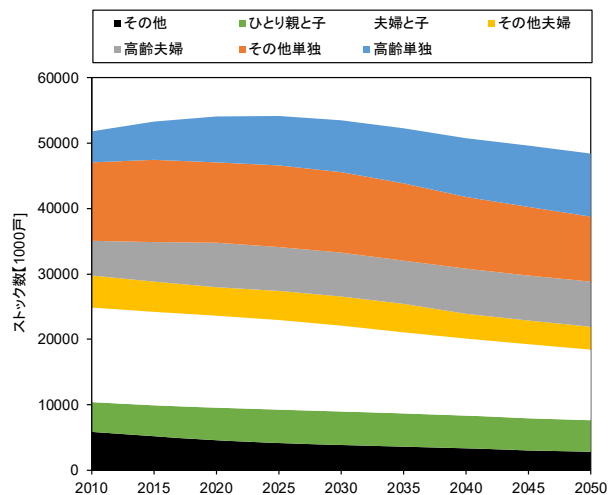


図3 家族類型別世帯数の推移(全国)

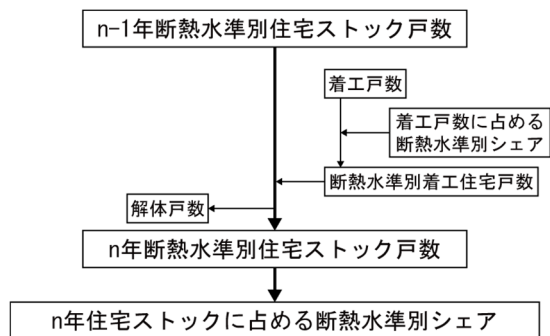


図2 断熱水準別シェア推計フロー

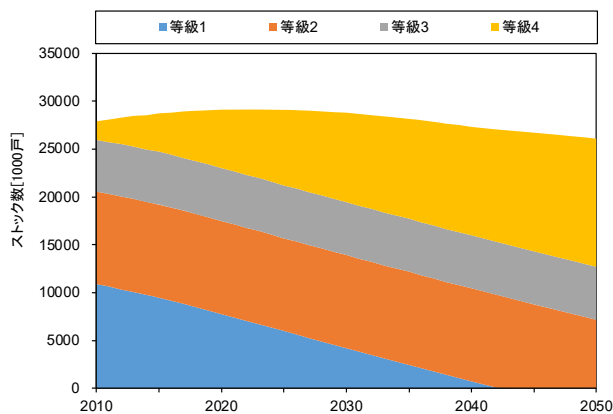


図4 断熱水準別住宅ストック戸数の推移(戸建住宅・全国)

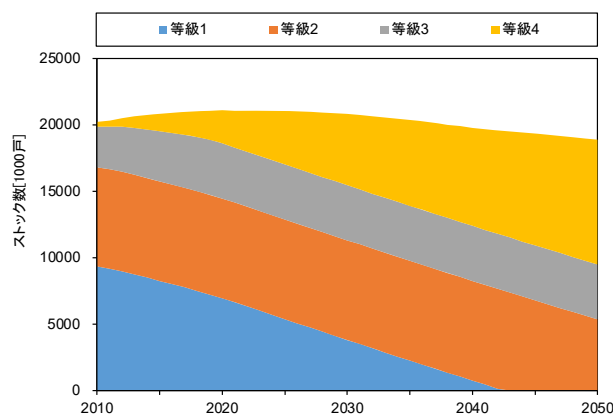


図5 断熱水準別住宅ストック戸数の推移(集合住宅・全国)